

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日 運輸省特別郵便承認第六二七号
明治三十二年十月十日第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
平成二十一年十一月一日発行(第四百十二巻第十一号)

ホトトギス

十一月号



俳句随想 〔三百二十九〕

汀子

平成二十一年は虚子没後五十年である。ここで再び虚子の歩いて来た道を考えて今後の伝統俳句の進むべき道を正しく確立して行かなければならないと思う。

これまでホトトギスを支えて来られた方々もご高齢になったが、それらの方々が矍鑠として中心で活躍して居られる姿は心強い。

その一方では、新しい若い人達が参加してくれるようになった。その中には立派なキャリアをお持ちの方も居られる。それらの人が真摯に伝統俳句の道を求めて居られることは心強い限りである。

天地有情の裏の「通信欄」に次のようなことが書かれてあった。

「俳句の道に入って知ったことの一部、

★余りにも自然の物を知らなかったこと。

★余りにも言葉を知らなかったこと。

★余りにも自己中心であったこと。」

世間では立派な地位に就いて居られる方であっても、俳句を作ることによって違う世界があることに気がつかれたのであろう。このように自分をしっかりと見つめる術を心得ておられる方が、更に俳句を通してより世界を広めようとしておられる。素晴らしいことではないだろうか。

旬日記 汀子

平成二十年十一月一日 関西ホトギス同人会

見返りの紅葉明りの弥陀とこそ
薄紅葉より薄紅葉へと順路
東山集つて来る時雨雲
秋惜む心は京の旅とこそ
紅葉してをりしと告ぐる紅葉かな
十一月三日 関西ホトギス俳句大会
落葉掃く手を止め案内人となる
刻々と深む紅葉に京人出る
十一月三日 関西野分会
鷹の空見えぬ氣流を見せてをり
霜除の庭と京の雑踏暮る秋
抜けて来し京の雑踏暮る秋
球根を土に預けて秋惜む
十一月三日 下萌句会
行秋の京の人出のあなどれず
京の秋惜む集ひにある名残
京の路地抜けて近道暮る秋
これよりの京を語りて初時雨
十一月五日 ロイヤル俳壇
六甲の稜線見せて文化の日
いくたびも読み置く稿や文化の日
雲重き日はや暮れて初冬かな
快晴の初冬の二日京にあり
風道も見せて櫓田なりしかな
十一月八日 悼大塚千二様
長き夜の絶筆拝し偲ぶのみ
長き夜や尽くし来られしこと偲
芭蕉忌に思ふ心に從ひぬ
華やきを消しはじめたる庭の冬

十一月十一日 綿業倶楽部

戸開やうやぐに鷹の日和となりけり
やうやくに鷹の日和となりけり
十一月十三日 清交社
七五三とはあきらかにすれ違ふ
着崩れを脱いでしまひぬ七五三
仕事の目庭に休めて石路の花
石路咲けば近づく忌日なりしかな
早々と済ませ置くこと冬構
海に沿ひ行けば山路よ石路の花
十一月十四日 工業倶楽部
寝不足の朝もつとも冬めける
神の留守とて朝の作務夕の作務
雲重き一日なりけり冬めける
満天の星も冬めくものと
十一月十五日 中国ホトギス同人会
無患子の落葉の軽さ吹かれし
その子の消息問ふも小六月
袴着の両手あづけて通せんば
七五三らしき車が又着きぬ
みな鴨を見てある水辺離れ来し
十一月十六日 中国ホトギス俳句大会
晴れてゆく早さ乾いてゆく落葉
一片の木の落葉尽くせる日を思ふ
これよりの落葉尽くせる日を思ふ
十一月十七日 アサヒカルチャー
誰彼の遠きまなざし落葉道
と違ふ庭の惜しまる散黄葉
掃き寄せること落しまる散黄葉
十一月十八日 有恒俳句会
田圃の通り過ぎたる跡と見し
冬構せしとは見えぬ一部分
風に吹かれ来しもの又吹かれ
時紅葉尽くせし色を地に移す
冬紅葉とよべば親しむ心あり
猿蓑を又繕きて時雨の忌
志高く持つとき時雨の忌

十一月十八日 無名会

潮風の吹き上げて来し石路の花
明るさをとどめ冬めく水辺かな
旅心冬めく大地に冬の色を置く
朝掃きて掃きてなほ散る黄葉
落葉踏み一度は掃いて置かねばと
十一月十九日 夏潮句会
やがて庭黄葉散り敷く日も近し
孤高とは風もまとはぬ芒かな
一劃は冬寄せつけぬ芒
音立てて朝より落葉しぐれかな
一部分その一部分冬構
会済めば初雪の地へ向かふと
よべ星の連れし風なりしかな
十一月十九日 摩耶山俳句大会
山を抱き山に抱かれ冬黄葉
冬は人訪はぬ句碑とて山深く
快晴の山の寒さを諾ひぬ
十一月二十七日 きょうぎ会
東京は冬めく雨となりけり
荃漬は一人前を旅の荷にけり
結局は車拾ひて冬めく荷にけり
荃漬に進む食欲恐れけり
十一月二十八日 時雨会
猿蓑になじみたるより時雨の忌
どことなく十一月にある余裕
風に吹き私ほれし星仰ぐ
十一月二十九日 句会と講演の会
篇枯れて自縛の蔓の行方かな
箒目の新しき朝神の留守かな
待ち合はせ場所は変らず神の留守
十一月三十日 野分会
目貼してよりも出掛けることばかり
鷹の空とて道標あるにけり
滞在を終へる日の冬晴れしこと

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十年十一月一二日 関西ホトギス同人会、大会

東山 結界として 時雨雲
末枯るるものに 寺苑の風優し
路地といふやや寒き古都ありにけり
静けさに鳥語に 古都の秋惜む

十一月三日 関西野分会

新しき目 貼小諸の 虚子旧居
歪みたる 玻璃戸真つ直ぐなる目 貼
鷹一羽 放ち火の山鎮もれり
鳶は輪を 鷹一線を 描きけり

十一月三日 虚子記念文学館授与

神無月 虚子への心失せぬ 館

十一月三日 袋返し

水都てふ 浪速の 雅柳散る
木の実落つ音に ハイヒールの止まる
古都といふ 洪滞地 獄冬近し
日に風に 君の背中に 秋惜む
紅葉して 京はんなりとして きはる
文化の日 虚子を 学びし人 集ふ
秋深し そんなに 飲むんやめなはれ
行秋を見送る 奥田好子かな
白々と 明けて 茶の花日和かな

十一月四日 刈谷市民俳句大会

飛びゆける車窓の景も 冬支度
秋惜む 旅を刈谷に 締め括る

十一月五日 一水会

行秋を見返る 阿弥陀如来かな

十一月六日 蕉心会

秋惜む 音に 地下鉄 滑り込む
この流れ 野山の 錦越え来しと
行秋を 乗せ 行く 流れかと思ふ
水に 浮く 芥の色に 秋惜む
神渡私を 連れて 行かないで
咲くものに 聴き 秋蝶なりしかな
秋惜む まだまだ 明日を 遠くして

十一月八日 国民文化祭

川の 黒山の 騒きにも みづれる

十一月八日 さる佳人に請われ

冬めける 君のゑくぼでありにけり

十一月十日 朝日カルチャー若草句会

もう一つ 旅を 控へて 小六月
散りてより 山茶花色を 明かし 初む
稿終へし より 小春日を 賜りぬ
風よりも 羽音 山茶花 零しけり
副都心ビル 小春日を 突き刺せり

十一月十三日 土筆会

小春日や 老松 動き出しさうな
躍りつつ 竹笠 沈んで ゆきにけり
竹笠上ぐ 芥も 捕れてをりにけり
蓮根 掘る 活断層を 近づけて
苑小春 こんなに 人が居やうとは

十一月十五、十六日 中国ホトギス同人会、大会

鶴島へ 三步の 橋や 冬ぬくし
鳴の陣 一羽 離れしより 崩れ

碧眼の母の 見守る 七五三
石路の黄といふ 儚さと 華やかさ
街騒を 遠ざけて 踏む 落葉かな
実を 拾ふをば さんいて ぶおちば 浴び

十一月十八日 草木瓜会

丸の内 落葉 掃くより 動き出す
コンクリート ジャングルに 舞ふ 落葉かな
凎に 多摩の 稜線 尖りゆく

十一月二十日 登高会

一茶忌や 雀何やら 姦しき
京の 路地 酢茎 香りて 来る 宵
東山 時雨 天王山の 黙
時雨 雲湖 西湖北に 繋がれり

十一月二十四日 根岸子規庵等散策

冬の 庭子 規の 愛した 天地かな

十一月二十五日 若水句会

初時雨 子規庵 昏く 灯されし
冬紅葉 子規も こころを 歩きしか
口紅に 正客の 漫の あらたまる
冬紅葉 仰臥 漫録 生れし 庵
口切や 亭主の 白き 掌

十一月二十六日 目黒学園句会

柿落葉 生り年といふ 嵩を 掃く
三の 酉隣家 出火といふ 不思議
浅漬の 白さに 酒の 進む 進む
天恵に 乾いて ゆきし 柿落葉
浅漬の 灰と 香りし 朝餉かな
その中の 細き 一本 浅漬に

十一月二十九日 ホトギス社句会

枯蔦や 正俊さんと 来し ホテル
枯蔦や 来年 ここで 胴上げを

雑詠

廣太郎 選

瀬をかへて半日ほどの鮎掛に	たつの	浅井青陽子
来月に期すことのあり暑に耐へて	同	同
ありのままわれを語りて夕端居	同	同
草笛や八十路の青春無しとせず	福山	竹下陶子
てのひらにあまる紫花菖蒲	同	同
蟬よりも詩の貧しき老詩人	同	同
幾重にも丹波の闇や蛩舞ふ	神戸	山田弘子
ふる里の名もなき新茶なれど良し	同	同
靴底にまづ入梅を覚えたる	同	同
忙中の閑のひとつき藤椅子に	京都	安原 葉
独り居の壁に蠅虎けふも	同	同
空梅雨の朝の日けふも昇りけり	同	同
十六夜に果てし三日の月の旅	樞原	稲岡 長
十六夜の新居を祝ぎて集ひけり	同	同
又逢へば月の主となりゐたり	同	同
大櫓 立夏の雨の潔し	相模原	木村享史
手術痕二つに増えし菖蒲風呂	同	同
身を細うして牡丹の風を耐ふ	同	同

木道の尽き鈴蘭の香に入りし	東京	河野美奇
石庭のなべて仏よ苔の花	同	同
雨止みし蛩の闇の新しく	同	同
神田とは祭と川と江戸つ子と	同	大久保白村
露涼し路地の奥まで電気街	同	同
江戸文字で三社祭と筆太に	同	同
虚子賞の意を推し量り露涼し	神戸	千原叡子
関東と昏るる時間差夏の月	同	同
灯涼し懐古は虚子へつながらりて	同	同
独りなるととき万緑の怖しき	八尾	岩垣子鹿
一杯のジョッキに暑き日が消える	同	同
ふらふらと又炎天へ出てゆける	同	同
潮風と言へど梅雨どきなる重さ	同	山下美典
風筋が虫通り筋蜘蛛の網	同	同
干草の匂にもある乾きぶり	同	同
体中欲しがつてゐるビールかな	神戸	涌羅由美
青嵐風にも重さありにけり	同	同
百点の吾子に褒美のさくらんぼ	同	同
斑猫に任せてをれぬ径急ぐ	同	同
待ち合せ場所を糠蚊に追ひ出され	香川	湯川 雅
視線皆つれなく逸れて姫女苑	同	同
色と彩競うて木々の梅雨に入る	東京	橋本くに彦
箱庭の水音にある世界かな	同	同
自らの水輪出られぬ水馬	同	同

雑詠句評（十月号より）

暮潮・比奈夫・仁義
雅・昭代・一步
純也・弘子・くに彦
しげ人・廣太郎

今生の花見納めて逝かれしと 相模原 木村享史

かなりの年輩の方の死を句にしたのはすぐ分かるが、その最期が自若としておられたらしいことに安心する。「花」は日本の自然のなかで、最も愛されている景物なので、その「花」をもってきたところに、日本の自然を愛し、ひいては自分の人生を大事にした行き方の人の生涯が察せられる。またこの句の作者も享史さんの尊敬する方なのであらうし、この句の当事者本人も享史さんの尊敬する方なのだろう。「死」という何よりも尊厳なものをまともに句にするのはまことに難しいが、この句はあえてそれを試み、成功していると言つていいだろう。（暮潮）

花は毎年季節が来ると綺麗に咲き満ちる。人間も四季と深く繋がっている。毎年その花を見続けてきた人も何時かはその生が終つてしまうのである。そしてその時期が丁度花時であれば、やは

り花を愛でて逝かれる希望は強く持つものである。人間、そして万物の生命が重く語られている。（廣太郎）

若葉してらふそく能を待つ古刹 東京 川口利夫

「らふそく能」という珍しいものを私は知らない。どこの古刹で演ぜられるのかも勿論のこと。句評依頼のとき、すぐ辞退すればよかったのであらうが締切の日が迫ってからでは致し方もない。作者に申訳のないことだが二三お尋ねして稿を終りたい。「らふそく」というからは、簪を焚く薪能と同じように夜の演能であらう。ただ上五の季題は若葉であり、「して」とあるからやや進行形。古刹を囲む一山が若葉に包まれてということになるので、演能はやはり庭の上かとも思われるが、屋外だと燭の火が揺れたりして心許ない気もする。また夜になると待っていた間の若葉が見えなくなるのも難しい。結局季題の若葉と能の関係が句の中からは見えて来ない。知らぬ人にも分からせるということの難しさ。

（比奈夫）

筆者は一度、虚子作の新作能「実朝」が「らふそく能」の形式で上演されたのを鑑賞した事がある。能楽堂の中であつたが、照明を落し、舞台の周りを蠟燭で囲むのである。この句は「古刹」であるので野外だろう。この古刹の「若葉」を通して、能の幽玄の世界が目の前に拡がってくる。（廣太郎）

（以下略）

天地有情

新緑の彩に風音違ひあり
 裏木戸は川へ開けある夏落葉
 虚子つけし名前大事に五月来ぬ
 卯浪寄す水平線を糺しつつ
 夏は惹かるる屋久島の地図にさへ
 涼しさに黎の杖を突いて出る
 水無月やいつもどこかに水匂ひ
 雲の峰消ゆるところは見せぬかな
 今宵はも月の主と客となる
 十六夜の月なつかしく集ひけり
 男梅雨富士全容を現はせり
 足が向く老いの細道著我の花
 籐椅子に風の気配といふものを
 咲き終へて夏木立めく庭となる
 掌のやうな火蛾来る富士の闇
 何もかも果てし鵜川や星の闇
 小暗さに墓屋をなく法の庭
 里人の直ぐ其処と云ふ油照

浜田 田中静龍
 同 同
 東京 稲畑廣太郎
 同 同
 神戸 後藤比奈夫
 同 同
 同 長山あや
 同 同
 榎原 稲岡 長
 同 同
 東京 笹倉 潤
 同 同
 神戸 山田弘子
 同 同
 東京 河野美奇
 同 同
 吹田 宮崎 正
 同 同

横顔の子規の秋思を思ひけり
 堂縁にまで黄落の及びけり
 梅雨の世を吾と語らず皆逝きぬ
 軍歌こそ吾が梅雨の世の愛歌とし
 鍵ひとつたよりの出入り梅雨館
 きれぎれの夢に明易かりしかな
 一枚の田植の始終畦に見て
 山を背に水廻りよく代搔ける
 吾が家より五分歩けば螢の夜
 ぼちぼちと来る人に飛び螢かな
 水無月の庭に夜待つばかりごと
 失敗を恐れぬ心意氣涼し
 町ひとつ洗ひつくして虹立てり
 沖望む莊古りにけり月見草
 一点は蠅虎の子なりけり
 脚ながき娘になりしかな更衣
 鯛網の昔を語る句碑となる
 故里を捨てし一罪鳳仙花

京都 安原 葉
 同 同
 豊中 瀧 青佳
 同 同
 東京 今井千鶴子
 同 同
 福岡 松尾緑富
 同 同
 熱海 嶋田 一歩
 同 同
 宝塚 水田むつみ
 同 同
 箕面 井上浩一郎
 同 同
 たつの 浅井青陽子
 同 同
 福岡 竹下陶子
 同 同

子選

天地有情句評

汀子

十六夜の月なつかしく集ひけり 樞原 稲岡 長

仲秋の名月の次の日の月に心を置く仲間。

男 梅雨富士全容を現はせり 東京 笹倉 潤

激しい梅雨の降りに洗われた名峰富士山。

咲き終へて夏木立めく庭となる 神戸 山田 弘子

木の花が終わると万緑の様子に変わる庭のたたずまい。

掌のやうな火蛾来る富士の闇 東京 河野 美奇

山荘の灯を恋いて掌のような大きな火蛾が窓に張りつく恐怖。

里人の直ぐ其処と云ふ油照 吹田 宮崎 正

直ぐ其処とは人によって解釈が変わる。暑い日差しの中の距離感

が想像される。

堂縁にまで黄落の及びけり 京都 安原 葉

堂縁の前に銀杏大樹があり黄葉が散る頃となった。見事な黄落

を描く。(以下略)

感性。

虚子つけし名前大事に五月来ぬ 東京 稲畑廣太郎

虚子につけてもらった名前を大事に思う誕生日が来る作者の初

心。

夏は惹かるる屋久島の地図にさへ 神戸 後藤比奈夫

世界遺産に登録された屋久島への思い。

水無月やいづもどこかに水匂ひ 神戸 長山あや

陰暦六月の異称水無月は梅雨の季節を抜けたばかりの印象を持

つ時期。